

値段の

# むかし

【第2回】

54

## レジャー 海外旅行・国内旅行

最近では、ワーク・ライフ・バランスについての意識が高まり、積極的に休暇を取ろうとする動きが見られます。海外旅行も昔と比べればだいぶと手軽に出かけられるようになりました。今回はレジャーの中でも旅行の値段の移り変わりと、その楽しみ方の昔と今についてみてみましょう。

## 大型連休の登場

かつて日本では盆、暮れ、正月ぐらゐしか休暇らしい休暇がありませんでしたが、1948年（昭和23年）に「国民の祝日に関する法律」が施行される

と、4月の終わりから5月の初めにかけて大型連休が登場しました。この大型連休が「ゴールデンウィーク（GW）」、「黄金週間」と呼ばれるようになったのはどんな由来があるのでしょうか。はつきりしたことは分からないようですが、当時この連休中に映画館への入場者が増えたことで、より多くの人に映画を見てもらおうとして映画業界の関係者が名付けたという説のほか、この期間にはラジオの聴取率がもともと高い「ゴールデンタイム」だったことから名付けられたという説などがあります。

定期的な休日については、明治初めに官庁を中心に毎週日曜日を休みとする週休制が始まりましたが、戦前までは中小企業では休日は月に2回というのが一般的でした。1947年に制定された労働基準法によって週休制が法制化されます。日本で週休2日制が導入され始めたのは、高度成長期の1960年代前半頃からです。1988年に労働基準法の本則に週40時間労働制が明記され、週休2日制の普及にはずみがついていきます。

さらに「ハッピーマンデー制度」によつて、2000年に成人の日と体育の日が、2003年に海の日と敬老の日が月曜日に移動して3連休が増えるとともに、ワーク・ライフ・バランスに対する意識の高まりも相まって、旅行やレジャーを楽しむ下地ができてきたといえるでしょう。

## 国内旅行の移り変わり

こうして増えた休日の有効な過ごし方の一つが旅行です。

日本の旅行業は、日本旅行創設者の南進助氏が1905年（明治38年）に、高野山や伊勢神宮への団体旅行を斡旋したことに始まるといわれています。翌年には、「鉄道国有法」が制定され、その後の鉄道網の普及とともに、国内旅行が次第に活発になっていきます。職場の慰安旅行や修学旅行は、明治期から行われていたようです。

戦中戦後の混乱期を経て、日本の旅行業が本格的に発展するのは、高度経済成長期に入ってからです。

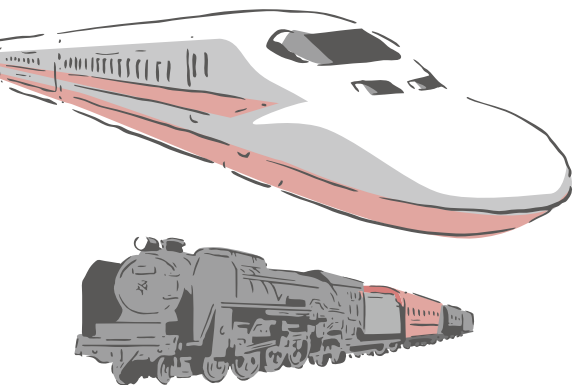
1952年（昭和27年）には「旅行斡旋業法」が制定され、旅行代理店が次々と誕生し、効率よく観光地を周遊するパケットツアーが登場します。当初、近くの温泉地や観光地が主流だった旅先も次第に遠方へ。1970年に大阪万博が開催され、続いて国鉄による「ディスカバー・ジャパン」のキャンペーンが始まると、空前的な旅行ブームに沸きます。モーターゼーションの進展や、旅を特集する女性誌の隆盛などによつて、宿泊を伴う国内旅行者数は右肩上がりです。

旅行費用の推移を見てみましょう。総務省の「家計調査」によると1965年の旅行費※は、1万592円でした。それが、大阪万博が開か

れた1970年には2万3403円、その10年後の1980年には7万1350円と大幅に伸びました。その後、1990年には13万3141円、2000年には14万6216円、2011年には10万5351円となっています。

※総務省統計局「家計調査年報」1世帯当たり年間の品目別支出金額及び購入数量（二人以上の非農林漁家世帯、全国）より。宿泊費（パック旅行含む）と交通費（鉄道運賃、航空運賃、有料道路料、他の交通）、旅行用かばんの費用を合算したもの。

旅行費用全体の約3割が交通費と言われます。例えば大阪万博が開催された1970年当時、東京から大阪に新幹線で行った場合、片道の乗車料金は2230円、ひかりの指定席特急券は1900円で合計4130円でした。現在の約3分の1の料金ですが、サラリー

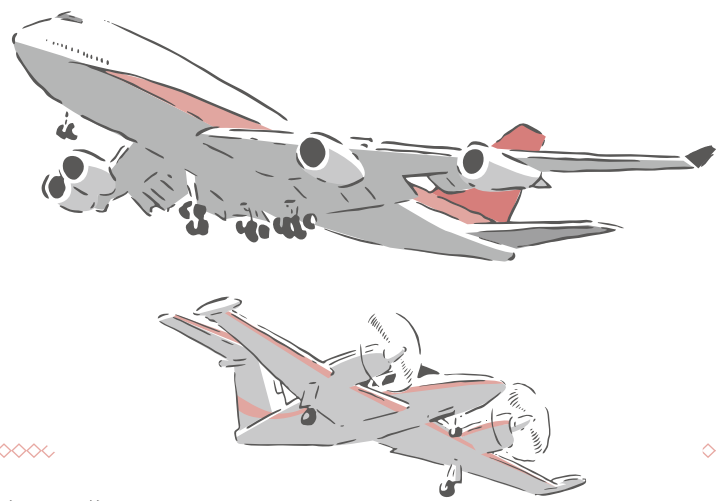


マンの初任給が4万円程度だったことを考えると、家族揃っての旅行はかなりの出費を覚悟する必要がありました。ちなみに当時駅弁は200円程度、駅売りのお茶は20〜30円でした。

もう一つの大きな出費である宿泊料金はどうでしょう。「値段史年表 明治・大正・昭和」（朝日新聞社刊）によると、1968〜71年ごろの全国の民宿の平均宿泊料金は、平均で1600〜1900円となっています。ホテルや旅館などでは倍以上の宿泊料金がかる場合もあり、宿泊を伴う国内旅行は一大イベントだったと言えます。

ところで、国内旅行の伸びと歩調を合わせるように盛んになったのが新婚旅行です。日本における最初的新婚旅行は坂本龍馬とお龍の薩摩への旅行などといわれますが、戦前までは新婚旅行へ出かけるのは、一部上流階級に限られていて、活発になるのは戦後のことです。1960年頃には熱海や箱根、伊香保、別府、雲仙などの温泉地が人気でしたが、1960年代後半から1970年代には、宮崎が新婚旅行のメッカとなりました。ピーク時の1974年には、その年に結婚したカップルの3分の1に相当する約37万組もの新婚旅行者が宮崎市内に宿泊したといわれます。ちなみに当時の羽田―宮崎間の航空運賃は片道2万6000円でした。

さて順調に拡大していた国内旅行も1990年代以降は頭打ちとなり、職



### 「憧れ」から「手の届く楽しみ」 になった海外旅行

場の慰安旅行は減少し、家族や個人、小グループでの観光が増えています。代わって1980年代後半から急増していったのが海外旅行でした。

今ではすっかり一般的なとなった海外旅行ですが、留学や移住、ビジネスでの出張などを別にして、観光旅行を目的に自由に海外渡航ができるようになったのは、1964年（昭和39年）4月1日以降のことです。

最初の旅行先として人気を集めたのが、流行歌に歌われ、映画の舞台としても話題になったハワイでした。当時、

ハワイへの飛行機のエコノミークラスの正規運賃（往復）は22万5000円。サラリーマンの初任給が約2万円前後だったことを考えると大変高価ですね。

そのハワイへの初めてのツアーが実施されたのは、海外渡航が解禁になってわずか1週間後。添乗員2名、ツアー客23名の団体で、ツアー代金は一人あたり7泊9日で36万4000円だったそうです。一行は3年前から毎月1万円ずつ旅費を積み立てたといいます。

海外渡航が自由化されたといっても、当時1ドルは固定相場制で360円。また、1人が1年間に使える外貨は500ドルまでと制約も多いものでした。

しかしその後、海外旅行者数はどんどん増加していきます。1964年に12万8000人弱だった渡航者数は、その後毎年20%以上の伸びを示し1972年には139万人、翌73年には64%増の229万人。オイルショックで伸びが低迷しますが、バブル期に入りまた大きく伸び、1990年には1000万人を超えます。そして2012年には1700万人。若い人から、高齢者も含め、いまや毎年海外旅行する人も珍しくないほど、気軽な旅になっています。

実際、ハワイ旅行のパッケージツアーの価格と大卒初任給とを比較すると、

90年代半ば以降は、大手旅行代理店の代表的商品の「ホノルル6日間」のツアー料金を初任給が上回っています。海外旅行が「憧れ」から、「手の届く楽しみ」になったことがうかがえます。

### 旅の価格破壊

さて近年、国内旅行、海外旅行いずれにおいても、パッケージツアーの種類が多彩になったことや、インターネットで気軽に航空券やホテルの手配ができるようになったことを背景に、価格破壊が進んでいます。

たとえば韓国へは1万円前後、ヨーロッパでも往復10万円以下と昔前では考えられない料金の格安航空券があります。また国内でも、早めに購入することで割安となるバーゲン運賃の航空券やキャンセルが効かない特別割引運賃の航空券があります。さらに最近では、LCC（ローコストキャリア）と呼ばれる格安航空会社も登場しました。LCCでは、今まで航空会社が提供していたさまざまな顧客サービスを削減し、機体の回転率を高めることで低価格を実現しています。

選択肢が多様になった現代の旅。充実したサービスで旅をエンジョイしたい人、交通費や宿泊費は切り詰めて、旅行先での他の楽しみにウェイトを置く人など、それぞれが自分に合った旅をデザインできる時代になってきたといえそうです。